

仕事もマジックも 一期一会の精神で

「どうもー！ お笑い重視傾向マジシャン、ハッピー浅田です！」

僕がまず舞台で発する常套句。マジックが失敗しても、「いやあ、お笑い重視なんでー」とお茶を濁し、そのお笑いがウケなくても「そもそもマジシャンなんでー」と言い訳する…。こんな「生涯安心保険」を満期までかけているような僕は、（お見込みのとおり）尼崎市の地方公務員である。

マジックを始めたのは社会人2年目。仕事帰りにふらっと立ち寄った、デパートのおもちゃ売り場のマジックショップ。買わなくてもマジックを披露してくれるのだが、何度かチラ見しているうちに、店頭販売のマジシャンの手際にすっかり虜になってしまった。

「どんな仕掛けなんですか？」→「お買い上げいただければお教えますですよ。」→「うー、買います！」のスパイラルでいろんなグッズを買わされ…。いや買わせていただいた。だって、すごいお金かかるんですもん、マジック道具って。値段が安い物は壊れやすいから、もったいないマジック

グッズが欲しくなるし、お値段もどんどん高くなるし…。一説によると、中古の軽自動車を買えるくらいの金額だとか、そうじゃないとか。

それはさておき、日々お店に通うことで、自分が買った商品のアドバイスをもらったり、たまに開催されるお店のマジック教室に参加したりして、少しずつマジックを覚えていった…。

新しいマジックを覚えては、友人や職場の飲み会で披露する日々。その日も仕事帰りに飲み会の予定があつたので、マジック道具を自分のカバンに入れていた。忍ばせていたという意識もなく。いつものようにただ入れていた。

「支援者VVV利用者」から
「演者VVVお客様」へ

当時、入職3年目の僕は、保健センターで精神保健福祉相談員をしていた。業務の性質上、当事者が相談に来る機会は少なく、周囲の家族が困って相談に来られるという



尼崎市こども相談支援課係長
ハッピー浅田
(浅田 智一)

〔あさだ・ともかず〕1976年大阪府堺市生まれ。大阪府立大学（現・大阪公立大学）社会福祉学部卒。1999年尼崎市入庁。お笑い重視傾向マジシャンとして「第7回新人お笑い尼崎大賞努力賞」「第4回越前市お笑いつるつるイッパイ！コンテスト入賞」「第12回ワッハ上方主催アマチュア演芸コンテスト決勝進出」「ボルケーノ茨木2012優勝」等、各コンテストで入賞歴あり。

ことが多かった。「娘が鬱になっているが病院に行こうとしない…」「息子が独り言を言っていて、部屋から出てこない…」等。色々なお宅に家庭訪問をして、家族と話をする日々。

その人の家を訪れるのは4回目。過去3回、リビングで彼の母親と話をしていたが、奥にいたであろう息子さんの部屋の扉が開かれることはなかった。

いつものようにリビングで話をしていた時、そう言えば、カバンに手品道具があつたなと思い、何の気なしに母さんにお見せした。たわいもない雑談の流れで、そう言ったように思う。思ったより喜んでくれて、引きこもっていた息子さんに「何か手品してくれるみたい」と呼んでくれた。

普段は部屋から出てこない息子さんだったが、なぜかその時は部屋から出てきてくれた。母親のトーンがいつもと違ったからかもしれない。

初めて会った彼に緊張しながら、僕は全力でマジックを披露した。その時、リビングの空気が変わった…。ように思う。と言つても、



【写真右】ショッピングモールでマジックをすることも

【写真左】特別支援学校では、卒業生の皆さんと触れ合いました

爆笑や感動が生まれたわけではない。手品自体はつまらないものであったので、びつくりするくらい彼の反応は薄かった。でも、彼との関係性が劇的に変わった。その後は家庭訪問するたびにリビングで話をしてくれるようになった。たぶん、あの瞬間、僕と彼が「支援者と利用者」ではなく、「演者とお客様」の関係性になっていったからだと思う。

僕は社会福祉士でもあるので、保健業務以外にも、障害福祉や児童福祉といった福祉関係の業務に携わってきた。福祉の仕事は、利用者の方とどうつながるか、いかに寄り添えるかだと僕は思っている。でも、いきなり市役所の人から「お手伝いさせてください」と言われても、本当に心を開いてもらえているんだろうか。「支援者V/V利用者」では、本当に関係がつながったとは言えない。お互い信頼しあえた時にこそ、つながったと言えるはず。

常に自問自答している。そんな時、さっきのマジック披露を思い出す。あの時の「つながった」感覚は今も忘れられない。こつちが勝手に思い込んでいるだけかもしれないけど。

いろんな人に観てもらいたい！

マジックを覚えるとは色々な人に披露したくなる。手品協会とか演芸サークルとかに所属して芸を磨くのが相場だ。

でも、大きな団体に所属した時、芸事に

時間を割かれて、仕事が疎かになるのではとも思った。自分のペースで仕事もマジックもやりたい。だからフリーの立場で出られる場所を探した。

当時フリーの人間が客前に出られる舞台は、お笑いコンテストしかなかった。もともとお笑いにも興味があつた。大学の時にお笑いを目指そうかとも思った。思ったただけ。でも本当はやりたい。ウケたい。マジックを使ったお笑いコンテストなら、出られるかもしれない。「お笑い」も「マジック」も中途半端な僕でも、このアプローチなら…。

2005年1月、過去には友近さんも受賞しているという「新人お笑い尼崎大賞」というお笑いコンテストに、初めて「ハッピー浅田」という芸名でエントリーした。いろんな人をハッピーにしたいという思いでその芸名にした。

知らない人の前でマジックするのも初めて。もちろん、ものの見事に失敗して終わった。そこからたくさん台本を書いて練習した。台本重視のマジシャンって、あんまりいいとは思わなかった。その甲斐あつて2年後には決勝に行くことができた。料理番組風のマジックコンテストを披露し、結果は4位。入賞は逃したものの、イベントに呼んでくれる方が増えた。少しずつ知り合いが増えていき、口コミで呼んでもらえるようになった。今でも、仕事から福祉関係のイベントに呼んでもらうことが多い。コロナで修学旅行がなくなってしまう特別支援学校の生

徒さんたちの前でマジックを披露したり、アルコールや薬物の予防啓発のイベントで啓発マジックをさせてもらったりと、色々なところで披露させてもらっている。

今でも印象深かったのは、聴覚障害のある方々の集会イベント。手話通訳は付けずに動きだけのマジックショー。雑音になってもいけないので、BGMも流さなかった。マジック道具から発せられる音だけが会場に響く。お客さんは全く動かない。全員が僕の手に集中している。失敗できない。言葉や音楽でごまかせない。そんな緊張が心地いい。

と言えはかつこよく聞こえるが、実はめちゃくちゃタネがバレまくってた。そりゃ、ハンカチを入れ替えた瞬間、「シャッ！」とか音がしたらバレますよ。案の定たくさんの人に、いくつか見抜いたよと笑顔で言われた。でも、普段目の前でマジックなんて見る機会がないから楽しかったとも言ってくれた。本当にいい経験をさせてもらっている。

次がある保証なんてない

以前、総合病院の小児科病棟にお伺いしたことがある。小児がんなどで長期入院している子どもたちやその付き添いをしていく親の前で手品をする。僕の手品の時間、多目的ルームにみんなやって来た。でも、院内感染の恐れがあるので、部屋から出られない子が2人いた。小さな女の子と男の



社会人演芸サークル
「公共の利益」の仲間たち

子。小児科の先生の計らいで、特別に2人の個室を回って手品を披露させてもらった。ベッドに寝ている子の前だから、大掛かりなマジックはできなかった。なので、指先でできるような小さなマジックを披露した。

「次はもっと大きなマジックするからね」

「うん」。小さな約束。

1年後、地域のイベントで出演した後、女の子とお母さんが舞台袖にやってきた。

「以前入院していた時に手品を見せてもらいました子です。あれから元気になって、退院できました」

元気そうな女の子と笑顔の母親。嬉しかった。泣きそうになった。

後日、総合病院の先生に報告させていた。その流れで、僕はテンション高めに尋ねた。

「そういうえば、先生、あの男の子は元気ですか。もしまだ入院中だったら、またマジックさせてもらいます!」

また、あの男の子に会いたい。

「ああ、あの子は去年亡くなりました」

「…え?」

先生は何ひとつ表情を変えなかった。

「そういうところなんですよ、ここは」

僕は次もそのうち来るだろう、そう思っていた。思い込んでいた。

とにかく、今できることをやろう。今日会えた人が、明日も会えるとは限らない。目の前のお客様に全力で楽しんでもらおう。仕事もそう。一期一会を大切にしよう。あの

日からそう決めた。

社会人演芸サークル 「公共の利益」

活動を始めておかげさまで18年になる。最近では社会人として働きながら、お笑いをやっている人たちが増えてきた。

そこで、僕たちはとあるグループを立ち上げた。社会人演芸サークル「公共の利益」。働きながら、ボランティアとして余暇にお笑いを披露して、人々に喜んでもらおう。たくさんの人に喜んでもらうことで、いい社会になる。そんな心意気を持った人たちの集まり。

女芸人No.1決定戦「THE・W」に2年連続で準決勝進出した「栗尾」。上方落語協会開催の「彦八まつり」で優勝した「ペリカンたまご」。M-1グランプリでナイスアマチュア賞の「イーストシテイ」や「おっさんと若者」。M-1とR-1で1回戦突破組「天ぶらフライ」「ヨシネイビー」。お笑いコンテスト常連組の「ペドラザ」「スライディングマダム」「5年2組」etc.。正直なんのこっちゃ? という名前が並んでいると思うが、関西には働きながらお笑いを演者として楽しんでいる人たちがたくさんいる。先日は、グループのスピノフ企画として、平均年齢51歳というベテラン社会人演者を集めたライブを開催し、満員御礼の大成を収めた。

僕より面白い人たちが増えてきて、正直辟

易しているのだが(半分嘘)、それでも貴重な余暇を、自分が楽しむだけではなく、人を楽しませようという人が増えてきて嬉しい。

野望

そんな、おもしろ社会人たちと出会って、新たにやりたいことが2つ出てきた。

ステージに手ぶらで出て行って、センターマイク1本だけでマジックをしたい。

漫才師が羨ましい。スーツ一つでステージの中央へ向かっていく。うー、カッコいい! マジシャンは持てる限りの小道具を詰め込んでステージに向かう。それがカッコ悪いとは思わないけど、いつの日か己の拳(?)一つでステージに立ってみたい。

あと、ラジオ番組でマジックをして、リスナーを驚かせたい! だってラジオですすよ。ラジオを聴いている人を驚かせるマジックってどんなネタなのか。皆さん見た(聴いた?)ことないでしょ? だって、僕もないですもん。思いつきもしません。あーでも、やってみたい! ああ、考えるだけで楽しい。なんで楽しいんだろう。たぶん、実現したら、同じ空間に居合わせた人の笑顔が見られるから。その笑顔を見るだけでめちゃめちゃ嬉しい。ああ、そうか、僕は皆に力をもたらしていたんだ。一度限りかもしれないその笑顔を見て、自分が笑顔になっていたことに気づく。

「ハッピー浅田」は、「ハッピーな浅田」でもあるんだ。